第３章　未来に向けて(未来のすがたと目標)

田んぼ

「野の鳥の歌が聞こえるまち」を目指して

私たちは、目黒区の生物多様性の現状や課題を踏まえ、生物多様性をまもり、回復していくとともに、持続的な利用を図ることができるよう生物多様性をより良い状態に保っていく必要があります。

本計画では、私たちの目指すべき未来のまちのすがたを、「野の鳥の歌が聞こえるまち」としています。

将来の子どもたちが、野の鳥の歌が聞こえるまちで暮らせるよう、本章では目指すべき未来のすがたや目標などを示します。

3－1　計画の名称

ささえあう生命の輪　野鳥のすめるまちづくり計画

目黒区の生物多様性地域戦略※は、「野鳥注1」を都市における生物多様性確保のシンボルとしてとらえ、自然と共生する社会を目指す「野鳥のすめるまちづくり」をテーマとします。

また、「ささえあう生命の輪」は、「生物多様性」を言い換えた言葉です。

「輪」は、物質の循環、生物相互の関係性、個体間の絆、生態系、地球の生物圏の断面などのイメージを表します。自然界の調和や平和、さらには日本の文化の象徴である「和」にも通じる言葉です。また、「ささえあう」とは、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性など、地球の長い歴史と生命の連鎖の輪との相互作用の中で育まれてきたいきものたちの織りなす世界をイメージしています。私たち人間も、このいきものたちの輪の一員です。

○シンボルとしての野鳥

《みどりのつながりのシンボル》

市街地の中で大小の緑地が点在している目黒区では、個々の緑地を有機的に連結し、機能を連携させるネットワークの形成が重要な課題となっています。

そこで、散在するみどりを行き来し、緑地を基盤に生活している野鳥を、エコロジカルネットワーク※形成のシンボルとして扱います。さらに、海を越え、遠い国々を行き来する渡り鳥は、地球的視野に立つことのヒントを与えてくれます(P.29)。

《いきもののすめるみどりへの転換のシンボル》

鳥類は生態系ピラミッド※では上位のいきもので、植物や昆虫等の小動物など、餌となるいきものの種類や数が豊富で、生息に適した環境があればあるほど、多くの種の野鳥が生息できます。

季節感やうるおいを感じ、自然と共生するまちづくりを目指すうえで、みどりの量の確保だけではなく、いきもののすめるみどりへと質の転換を図るシンボルとして、野鳥を位置づけます。

図 3-1　生態系ピラミッドの概念図

《区民に親しまれるまちづくりのシンボル》

ウグイスの初音※を楽しむ、シジュウカラやツバメの子育てに一喜一憂するなど、庭先や身近な場所に訪れる野鳥は、区民にとってやすらぎやうるおいのある生活のシンボルです。また、多様な野鳥の生息できる環境は、一個の生物としての人間にとっても暮らしやすい快適な環境であるといえます。

このように、区民に親しまれ、身近な暮らしから生物多様性が確保された自然と共生する社会を目指すきっかけとなる野鳥を、まちづくりや活動のシンボルとしてとらえます。

注1　野鳥:愛玩用として飼う鳥ではなく、野外で自然に暮らしている鳥のことをいいます。

図 3-2　渡り鳥の移動にみる世界とのつながり

野鳥には、その土地でずっと生活するものだけでなく、多くの国・地域を経由して長い距離を移動する渡り鳥もいます。キビタキと同じヒタキの仲間のエゾビタキは日本では春・秋に見られる野鳥です。夏、ロシア付近で繁殖し、冬はインドネシア近辺まで移動する渡り鳥で、移動の途中、日本を通過します。

秋の木の実をついばんでエネルギーをたくわえ、この先何千キロにも及ぶ、長い旅路に備えます。例えば公園にある１本のミズキの木。私たちには緑陰や気持ちの安らぎなどを与えてくれますが、そのミズキの実１粒１粒に詰まった栄養分が、エゾビタキの長い旅路を支えているのです。目黒区にある１本のミズキの木が、エゾビタキを通して世界とつながっていることがわかります。

3－2　未来のすがた

（1）私たちのまち

「野の鳥の歌が聞こえるまち」

武蔵野の原風景として残されている「めぐろの森」では、森林の野鳥であるキビタキがさえずり※、オニヤンマが行き交う目黒川では清流の女王といわれるアユが生まれ、商店街ではツバメが毎年巣づくりし、公園や緑地にはさまざまなチョウ類が舞い、水辺ではゲンゴロウ類が泳ぎ、私たちはみどりの中を歩き、旬に親しみ、まちで育まれるさまざまな身近ないきものとふれあっています。

ここでは「野鳥」ではなく「野の鳥」とすることで、かつての武蔵野の風景を想い起こすことをねらいとしています。本計画が、目黒区が誕生した 80 年前、まだ武蔵野の面影を色濃く残していた昭和初期のころの「人と自然の関わり方」を考慮した、自然と共生するまちづくりを目指すものであることを表しました。

目黒区の鳥シジュウカラ

（2）私たちの目指す方向

まち全体にみどり豊かな環境をつくりだし、野鳥などの身近ないきものとのふれあいが広がり、自然と共生する暮らしを誰もが実践している社会を目指します。

●一本一本の樹木や拠点となる緑地が次世代へと引き継がれ、みどり豊かなまちが広がっています。

●自然豊かな場所からみどりのつながりに沿って、またみどりの拠点を経由して、さまざまないきものが区民一人ひとりの足元まで訪れています。

●生物多様性への理解が進み、私たちは生物多様性に配慮した、人に、自然にやさしい暮らし方をしています。

キビタキ

春、東南アジアから日本に渡って来る夏鳥。スズメ大。森林で繁殖し、良く響く美しい声でさえずります。

オニヤンマ

日本最大の大きさのトンボ。林縁の小川周辺にすみ、飛んでいる小昆虫を食べます。

アユ

清流を代表する魚。生まれてからしばらくは海で生活し、その後、川を遡り親になります。川底の石などに産卵します

ツバメ

春に台湾や東南アジアから日本に渡って来る夏鳥。泥とわらなどを使い、軒下にすり鉢状の巣をつくります。

チョウ類

都市の中にも多くの種がすみ、花の蜜を吸いに来ます。幼虫は種によって異なる植物を食べます。

ゲンゴロウ類

肉食の水生昆虫で、幼虫・成虫とも水中で暮らします。大型のゲンゴロウ類は全国的に少なくなっています。

MAMI

（3）まちと暮らしのイメージ

- 住宅地やビルの屋上にみどりがあふれ、まちかどにも木々が育ち、区の鳥シジュウカラをはじめ四季折々の野鳥と出会うことができます
- 休日にはみどりの散歩道※で身近な歴史や文化財、坂道を巡るなど、歩く活動が盛んです
- 自然豊かな奥多摩から、武蔵野台地の縁に残る崖線※の緑地を伝い、こんもりと育った社寺や公園等の樹林、学校の森やビオトープ※を核としてみどりのつながりが形成され、多くのいきものが目黒区を訪れています。奥多摩の森で繁殖していたキビタキやアオバズクなど、在来種※の樹木が育った森で繁殖するものもでてきています
- 土の面が広がり雨水は地下に浸透し、目黒川などの河川では湧水の復活などにより水質が改善して岸辺の植物を伝いながら東京湾の潮にのってアユやハゼ類など多くの魚が遡上しています。オニヤンマが飛ぶ浅瀬では、親子が川遊びをしています
- 春の花や秋の紅葉など移ろう季節の中で、身近な自然に親しみ、四季折々の地域の祭事や、旬の恵みを使った食事を楽しんでいます
- 日本伝統の生け花や茶道などのほか、目黒の伝統文化の担い手が育ち、目黒ばやし※や剣の舞※などが、お年寄りから子どもまで区民の中に脈々と引き継がれています
- 子どもたちは身近な公園など豊かなみどりの中で遊び、飛び交うチョウを追いかけ、夏にはセミ時雨(しぐれ)の中に遊び、秋の原っぱでは虫の合唱を楽しんでいます
- 自宅から歩いていける距離に公園が整備され、それぞれの公園では、青空の下で幼児の原体験※の場となる自然とのふれあいが見られます
- 公園は、花づくりや、落ち葉や剪定枝を活用する里山※の管理に地域の人々が関わり、自然や動物とのふれあいなど、さまざまなレクリエーションや活動の場となり、若い世代が積極的にボランティア等の活動に関わり、まちの人々の連携の中心になっています
- 土に親しみ、収穫する楽しみを都市でも味わうことが広がり、庭や屋上、公園などの菜園で野菜を収穫しています
- 地産地消※の考え方が浸透し、人々は生態系に配慮し、持続可能な利用に配慮してつくられた江戸野菜などを購入しています
- 商店街が産地と交流し、季節の野菜が店先に並んでにぎわいを見せています。また、区民は産地で農業の体験をしています
- 区内の事業者や大学は、敷地の中で積極的に樹木を育て、いきもののすめる環境づくりに貢献し、地域の環境学習の場になっています
- 区民、地域団体、事業者、学校、ＮＰＯ等は、互いに情報を共有して連携しながら活動しています

図３－３　未来図(左ページ)　いきものの名(P.90)

3－3 目　標

昭和初期に目黒区が誕生したころは、まだ武蔵野台地の自然があちらこちらに残り、人々は自然との関わり方を生活の知恵として暮らしの中に活かしていました。そして、自然の恵みに感謝しながら自然を利用し、残ったものは自然に還す循環利用をしていました。このころの人と自然の関わり方を基本とし、「未来のすがた」の実現に向けて目標を設定し、「取り組みの方向性」によって施策を推進します。

区民、事業者、行政等の主体が実施する取り組みは、「基本行動」として分かりやすい単語(動詞)で表わしています。「基本行動」は、区民一人ひとり、各主体の行動が連携し醸成されるイメージとして表現しています。

目標１ みどりの風景をまもり、いきものにやさしさのある環境をつくります

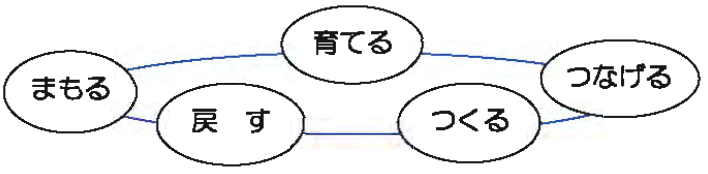
まちの成立ちや地域の歴史、育んできた文化、地形、土地の利用、緑地の分布、住民の活動などにより、それぞれの地域で差異が見られる「身近な自然」に目を向け、たとえ１本の木、１鉢の花、１匹の虫、１羽の鳥でもつながりの中で自然をつくりあげている大切なものという認識をもちます。

そして身近な自然からつくられるみどりの風景をまもりながら、いきもののすめる環境を戻し、つくり、公園等のみどりの拠点を整え、点在する社寺等のみどりの拠点をつなげ、エコロジカルネットワーク※(P.55)の形成を目指します。なお、ここでいう風景とは、「めぐろの風景」とした特徴的な８つの区分(P.14,15)とします。

○ いきものの生息に配慮した環境づくりに取り組みます
○ 地形･地勢を意識した風とみどりといきものネットワークをつくります注1
○ いきものつながりを説明型表示板等でアピールし、人と自然をつなげる場を整えます
○ いきものすめる土・地面・水辺を残します

・取り組みの方向性：環境形成の目標指標となる種を設定し、野鳥のすめる多様な環境をつくる(P.38,39　表３－1)

・基本行動



・短期目標の指標　　：野鳥の年間確認種数 50 種を維持し、70 種を目指す
タンポポ、ツバメ等の指標在来生物種の分布率 37%→50% 注2

写真　カントウタンポポ(駒場)

図３－5　エコロジカルネットワーク

注１　環境基本計画の重点プロジェクトの１つ
注２　区内の番地(約 2,200 区画)のうち、指標在来生物種が確認された(報告のあった)割合

目標２ 自然とのふれあいを大切にしためぐろの暮らしを未来に伝えます

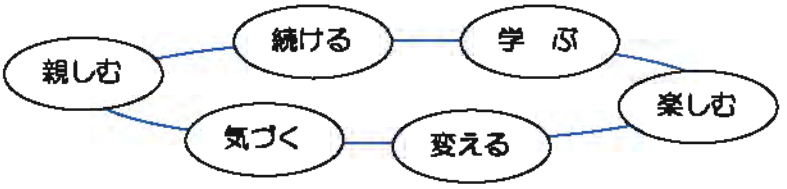
区民一人ひとりが、生物多様性を大切にしためぐろの暮らしに気づき、親しみ、自発的にライフスタイルを変え、未来に伝えます。

子どもたちは、自然やいきものとふれあう「原体験※」を通じてその大切さを知り、次の世代へと自然の大切さを伝えていくようになります。また、現在よりも自然との関わりが豊かな中で生活していたお年寄りの世代が、子育て世代の大人たちやその子どもたちに対して知識や体験を教え伝えていくことも大切と考えます。

- ○ 子どもたちが自然とふれあう原体験を大切にし、学校教育や生涯学習等で人材を育成します
- ○ 「歩いてみる・知る・耕す」－みどりの散歩道※などを歩くことからはじめ、たくさんの楽しみを収穫します
- ○ 自然の暦(こよみ)を大切にするなど、自然との関わりの中で育まれてきた文化を伝承します
- ○ 生物多様性の理解を高め、生物多様性に配慮した消費やライフスタイルへ転換していきます

・取り組みの方向性：親しむ・ふれあう・学ぶくらしを実践し、自然と共生する豊かな心を育む

・基本行動



・短期目標の指標　：世論調査における「生物多様性」の言葉の認知度 36.8% → 80%

写真　ホオノキの落ち葉のお面

目標３　すべての主体があらゆる活動で「ささえあう生命の輪」の確保を目指した協力と連携を行います

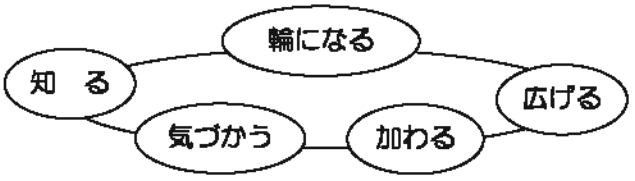
公園は、区民のいこいやレクリエーションの場となり、みどりの拠点や野鳥のすみかとなるなど、さまざまな機能を持っています。特に公園で行われている自然環境をまもり伝える活動や地域のコミュニケーションづくりのためのイベントなどには、世代を超えて多くの区民が参加しています。かつて里山※が地域に恵みをもたらしたように、今は公園が地域活動の中で私たちにさまざまな恵みをもたらしています。区では、公園を現代の「里山」ととらえ、みどりの拠点である公園での活動を重視します。(P.40　図３－6)

そして、すべての主体が身近ないきものの大切さを知り、いきものに気づかう活動を行う中で結びつきが生まれて互いの活動に加わり、そうした結びつきが広がることで、目黒区全体をひとつの輪につなげていきます。その結果、区民や団体等の個々の活動がより効果的に集約し、区全体の隅々まで広がった、持続可能な生物多様性に配慮したまちづくりを目指します。

- ○ 自然とふれあう活動を通して地域づくりを進めます
- ○ いきものののつながりに配慮した事業活動を広げます
- ○ サクラや公園の自然を活用したみどりの観光都市を目指します
- ○ 住民参加による公園活動の活性化等を促進します
- ○ 区民・事業者・団体・学校・行政等が一体となってささえあう生命の輪をつなげていきます

・取り組みの方向性：協力し、連携するまちづくり活動を推進し、ささえあう生命の輪を区内全域に広げる

・基本行動

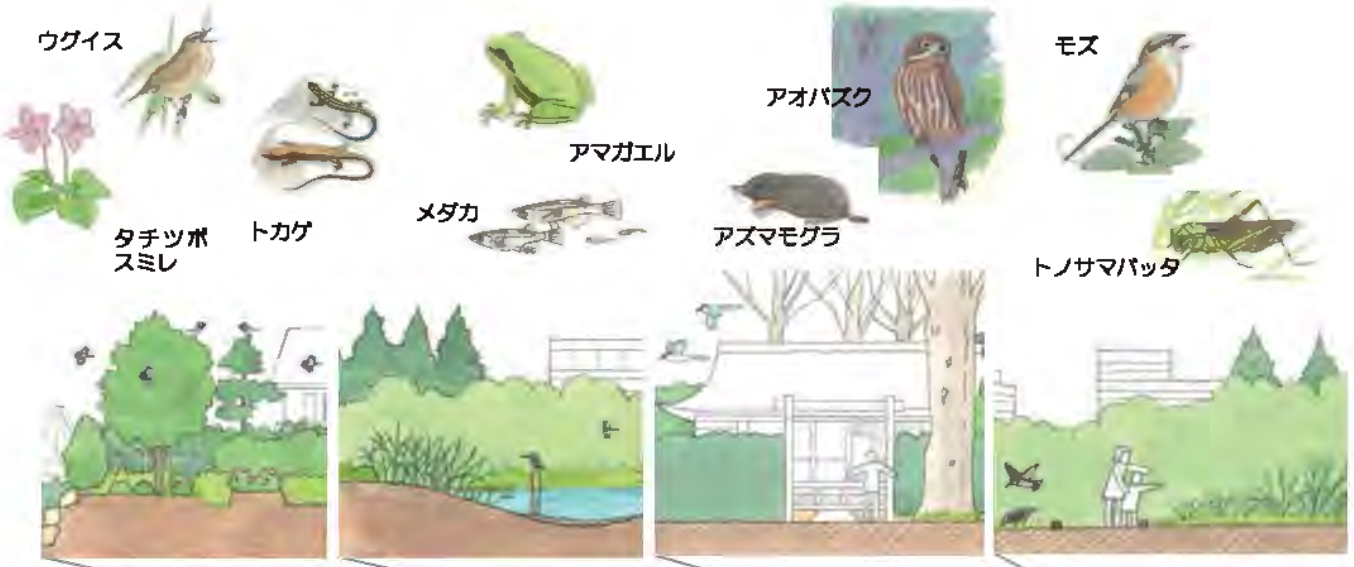


・短期目標の指標：グリーンクラブ※など公園等で活動を行う登録団体数 106 団体→120 団体
いきもの住民会議(活動団体･自然通信員※等の研修、交流)開催の継続

写真　駒場野公園での里山活動(炭焼き)

表３－１　環境形成の目標指標種の設定

「めぐろの風景」における環境形成の目標指標種(ガイド種)を設定します。指標種は、過去の動植物の資料や、区民による身近な生物調査※の記録から選んでいます(設定理由は附属資料３参照)。



区分	庭のある風景	小さな水辺の風景	屋敷林や鎮守の森の風景	草はらの風景
現在見られるいきものの例 いきものがすめる多様な環境づくりの考え方と	過度な舗装を避けて土の面を保全し、花壇、畑、季節の木々や生け垣、屋上等の緑化でみどりを広げ、つなげていきます。 ●キタキチョウ ●アオスジアゲハ ●アズマヒキガエル ●ニホンヤモリ ●シジュウカラ	岸から水中まで続くなだらかな傾斜をつくり、多様な水辺の植物の生育を図ります。植物が繁茂して水面を過度に覆う場合は、抑制します。水面は日照を確保し、水質の浄化を図ります。 ●カンガレイ(植物) ●モノサシトンボ ●アズマヒキガエル(産卵) ●キセキレイ ●カルガモ	既存樹木の保全を図りながら、将来の樹木の更新や林縁の保護のため、階層構造※のあるまとまった落葉樹や常緑樹の林を確保します。林床※は根の保護や落ち葉の堆積等により、多様ないきものの拠点として育成していきます。 ●カラスウリ ●クロアゲハ ●ニホントカゲ ●コゲラ	草地をいくつかに区分し、異なった草丈がパッチ状※に見られるように区分ごとに草刈高を変え、昆虫などの小動物が生息場所を選択できるようにしていきます。 ●ヤブカンゾウ ●ベニシジミ ●ショウリョウバッタ ●オンブバッタ ●オオカマキリ ●ツマキチョウ ●ニホンカナヘビ ●モズ(越冬)
活動主体の例	区民　事業者	区民　学校 団体　区	区民　学校 団体　区	団体　学校 区
回復目標指標種	●タチツボスミレ ●トウキョウヒメハンミョウ ●アズマヒキガエル ●ニホントカゲ ●ウグイス	●ゲンゴロウ類 ●キイトトンボ ●メダカ ●ニホンアマガエル(産卵)	●ホタルブクロ ●キシノウエトタテグモ ●カブトムシ ●ムラサキツバメ ●アオバズク(繁殖) ●アズマモグラ	●ホタルブクロ ●トノサマバッタ ●モズ(繁殖)

種名は標準和名※を用いています

雑木林や畑・水田の風景	都市の森の風景	広がりのある水辺の風景	新しいみどりの風景
雑木林※はクヌギやコナラ等を萌芽更新※するサイクルを設定します。草地から樹林まで移り変わりの中で異なった環境をつくることで、それぞれに生息する多様ないきものを保全します。 ●タチツボスミレ ●コクワガタ ●カブトムシ ●ウグイス	階層構造を持った樹林を核とし、特徴的な地形や、草地、水辺などの地域の環境と一体化したいきものの生息拠点とします。また、雨水のかん養等の機能を持つ水源林として湧水の保全・回復の源としていきます。 ●カントウタンポポ ●ジョロウグモ ●カブトムシ ●ヒグラシ ●オオカマキリ ●アオダイショウ ●ヤマガラ ●アズマモグラ	水源林を保全して湧水の確保を図り、安定した水量・水質を確保します。せせらぎ、たまり、ワンド※等の多様な環境と水辺植物の生育地を保全し、多様ないきものが生息・生育できるようにします。 ●ガマ ●ギンヤンマ ●アユ ●キンクロハジロ ●コサギ	種子が飛来するチガヤなどが生育する草屋根やブドウなどのつる性植物により、屋上・壁面・ベランダ等建築物の緑化を推進し、いきものののすめる環境をつくります。商店街ではプランター等を活用して吸蜜植物※を主体とした緑化を広め、チョウやミツバチなど花粉を運ぶいきものの回復を図ります。 ●アゲハ ●ナガサキアゲハ ●ツマグロヒョウモン ●ツバメ
団体　学校　区	団体　大学　東京都区	団体　区	区民　学校　事業者　商店街　団体　区
●オニフスベ ●ギンラン ●タマムシ ●アカシジミ ●ヘイケボタル ●ニホンアマガエル ●ヤマガラ(繁殖)	●ラン類 ●ウマオイ類 ●キビタキ(繁殖) ●オオタカ ●ホンドタヌキ	●ミクリ ●オニヤンマ ●アユ(産卵) ●カイツブリ ●コアジサシ ●カワセミ(繁殖)	●ニホンミツバチ ●ニホンヤモリ ●チョウゲンボウ

(分類の例)　●植物　●きのこ　●クモ類　●昆虫　●魚類　●両生類　●爬虫類　●鳥類　●哺乳類

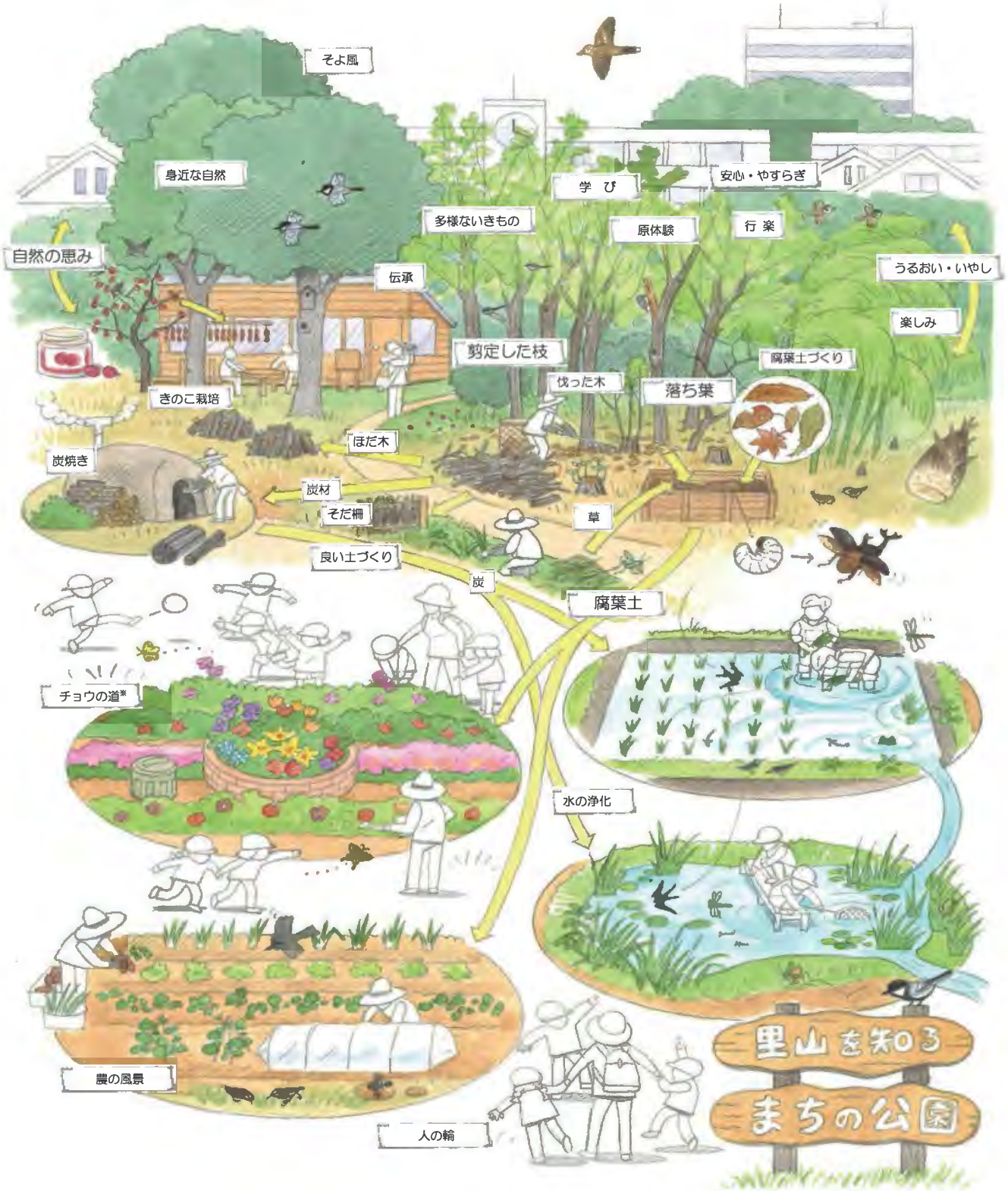


図３−６　里山を知るまちの公園